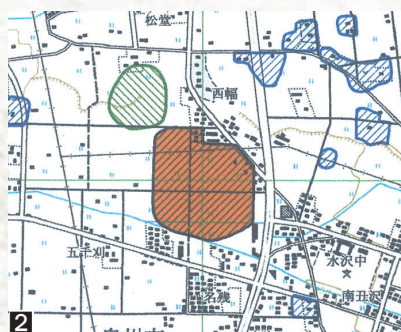




1

1 里鎗遺跡から出土した縄文晩期後半（今からおよそ3,000年前）の土器の一部。煮炊き用の大形深鉢のほかに、注口土器・浅鉢・つぼなどさまざまな形のものが見られる。里鎗遺跡の土器は現在市埋蔵文化財調査センターに保管されている 2 オレンジ色の部分が里鎗遺跡の範囲で、面積は約1ヘクタールと、かなり規模が大きい。伊東教授の調査地点は遺跡のほぼ中央部だと思われる 3 昭和27年の発掘調査状況（写真は「岩手県奥州市里鎗遺跡発掘調査報告（土器編）」より抜粋）



2



3



奥州遺産

——ときを越え

受け継がれるもの——

第124回

里鎗遺跡

Ⅱ 水沢字里鎗ほかⅡ

今から70年前の昭和26年、誕生したばかりの「胆沢平野土地改良区」によって行われた北下幅地区区画整理事業に伴い、里鎗遺跡から完形の縄文土器が出土した。このため、旧水沢町は東北大学の伊東信雄教授に発掘調査を依頼することとなった。

翌27年に発掘調査が行われ、わずか40平方メートルほどの狭い範囲から縄文時代晩期の土器が何と139個も出土したのである。これらは、先史時代の美術工芸品としても優れたものであり、里鎗遺跡は東北でも有数の遺跡であると評価された。

里鎗遺跡の縄文土器には使用痕があるものの、完形品が多いので壊れたものを捨てたという単純な廃棄行為とは考えられない。また、周辺から竪穴住居跡などの遺構が発見されず、土器を残した人々の集落の様子も全く不明である。

里鎗遺跡でどのような暮らしがなされ、なぜ多量に土器が捨てられたのか。答えは今なお土の中に眠っている。

広告